

LECTURE

講演会報告



● 文学部図書館情報学会企画 第6回文学部講演会 「世紀の実験ウィキペディア」

- 愛知大学文学部教授(図書館情報学専攻) 時実象一氏
- 12/13 長久手キャンパス

時実先生は、ネット上の無料オンライン百科事典であるウィキペディアについて、その制作と成功の物語とともに、「安易な引用はやめよう」とその信頼性へ警鐘を鳴らされました。

学生がレポート作成の情報源として利用する際は、出典

や他の情報源により、利用者自らが注意深く対処することが求められます。最大の問題は、執筆者の匿名性にあり、また政治的なテーマでは、論争と記事の書き直し争いが発生し凍結にいたるケースもあります。「誰でも執筆でき、誰でも編集や修正・加筆ができる」という特長には、光と影が存在します。さらに、ウィキペディアを考へる際、欧米に根強く存在しているフリーカルチャーの文脈で理解していくことが必要であると解説されました。

参加者は約140人で、活発な質疑がなされ、終了後にも時実先生を囲み、学生からの個人的な質問の輪ができました。

- 文学部教育学科企画・運営
第4回文学部講演会
「音・音楽を通しての、子どもたちとの対話
～障害のある子どもの理解に向けて～」
- 国立音楽大学教授 遠山文吉氏
- 10/31 長久手キャンパス



平成19年度に開設された教育学科が初めて企画・運営する文学部講演会が開催されました。会では、教育学科主任の富安玲子教授による記念の挨拶に続き、障害のある

子どもを対象とする音楽療法で我が国の第一人者である遠山文吉氏から、音楽活動を通して子どもを理解する基本をお話いただきました。お話の中で音楽療法の理論を分かりやすく紹介されるとともに、氏の40年に及ぶ豊かな実践から幾つかの事例

を紹介され、子どもの発達を促進することが音楽療法の大事な目標であり、音楽を通してさまざまな行動変化が生じること、僅かな変化が大きな発達へと進んでいくことを具体的にお話いただきました。

また、約1000人の聴衆がトーンチャイムなどの簡単な打楽器を使って「みんなであつろう」の曲を合唱・合奏し、楽しい雰囲気の中で音楽療法の実際も経験できました。

氏が最後に述べられた「子どもを理解し、子どもから学ぶために、子どもに対して畏敬の念を持って接することが大切」という言葉が強く印象に残った講演会でした。



- コミュニケーション心理学会講演会
「企業が求める『ヒューマンスキル』とその開発に向けて」
- 株式会社リクルートマネジメントソリューションズ
小方真氏
- 11/30 長久手キャンパス

小方氏は、アセスメントツールやトレーニングプログラムの開発だけでなく、諸学会などでの研究発表も精力的に行い、研究と現場をつなぐ役割を果たしておられる方で、職場においてコミュニケーションスキルやコミュニケーション力がいかに求められているかを、ご講演いただきました。メンバーや価値観が多様化している現代の職場だからこそ、積極的傾聴など「聴く」ことが大切であるということ、ロールプレイなどを通して学生たちにもわかりやすくご説明いただきました。

参加者は、コミュニケーション心理学の学生を中心に240人程でしたが、誰もが目を輝かせて聴いている姿が印象的でした。「日頃、コミュニケーション心理学で学んでいることが、社会で必要とされているスキルの一つであること」を知り、本当に嬉しくなったという学生の感想が、この講演会の成果を物語っているように思えます。

- 愛知淑徳中学校・高等学校
PTA講演会
「薬のいらぬ健康法」
- 医師 石原結貴氏
- 11/12 センテナリー・ホール



「思いきりテレビ」でおなじみの石原先生は医師ながら話術が巧みで、大変有意義なお話を聞くことができました。

講演会後、別の会場で行われた懇親会では、先生は講演会よりリラックスして洒落を飛ばされ、参加者はそのお話に堪能したと思います。

311人の満員の聴衆からは笑いが絶えず、和気あいあいとした雰囲気の中で講演会は進行しました。質疑応答の時間には、健康に関する質問に丁寧に答えていただきました。

- 文学部国文学科企画・国文学会運営
第5回文学部講演会
「文学のノイズ性について
—「社会学」の場での、藤原明衡『新猿楽記』と菅原孝標女『更級日記』との、なんともチグハグな出会い—」
- 桃山学院大学社会学部教授 深澤徹氏
- 12/6 長久手キャンパス



深澤先生の「専門は、平安末期から鎌倉初期にかけての転換期の日本古典文学ですが、広く日本文化を視野におさめた研究をされています。最近では著書『愚管抄』のヘウソとマコト——歴史語りの自己言及性を超えて」が特に注目されています。

今回は、「信西古楽図」や野村万之丞の「大田楽」などの興味深い映像をまじえた猿楽についての解説に始まり、『更級日記』の作者をもって「物語作家の誕生」と位置づけるに至る、非常にスケールの大きいお話をしてくださいました。西洋の現代思想をも参照しつつ古典のテキストに新たな価値を見出していくという、国文学の教員にとっても刺激的な内容でした。また、業界用語などの少々難しい問題についても、具体的にとらえやすいようにお話してくださいました。

普段の国文学の授業とは多少異なる、深澤先生の「社会学」の切り口には、多くの学生がひきつけられていたようで、大変有意義な講演会となりました。



- 文化創造フォーラム講演会
「まっさらな白紙の前へ
～書き尽くされた現在、
僕らが書けること」
- 芥川賞作家 諏訪哲史氏
- 12/20 星が丘キャンパス

諏訪さんは名古屋市在住で、
昨年の群像新人文学賞を『ア
サツテの人』で受賞され、同作
でそのまま第137回芥川賞
を受賞されました。いま最も
注目されている新人作家であ
るとともに、名古屋市在住者
の快挙に地元が大いに沸いた
のはまだ記憶に新しいところ
です。

ために講演に来てくださいま
した。外来の聴衆も多数駆け
つけ、すし詰め状態になった
会場では、まず諏訪さんご自
身が編集されたビデオが上映
され、授賞式で演歌を歌った
パフォーマンズなど茶目つ気た
ぷりのお人柄が披露されまし
た。

そのあと登場したご本人
もユーモアいっぱいのお話で、
会場からは大爆笑も起き、こ
んな楽しい人とは意外だった
という声も聞きました。じつ
は奥様は本学文学部のご出
身とのこと。また表現文化専
攻の清水良典教授とは群像
新人賞の先輩後輩の関係で
もあり、清水ゼミの授業に飛
び入り参加もされたとのこと
です。今後のご活躍を期待し
たいと思います。

- 第4回医療福祉学部言語臨床セミナー
「広汎性発達障害の発達支援の動向
—早期発見・対応、特別支援教育を中心に」
- 豊田市こども発達センター長 高橋脩氏
- 12/15 星が丘キャンパス



愛知、岐阜、三重の言語聴
覚士はじめ、保育士、教員、施
設職員など、発達障害に関わ
る専門スタッフ100人近く
が、2時間に渡り、講演内容に
熱心に耳を傾けました。

高橋先生の穏やかな語り
口調に加え、愛知県コローニーに

始まる長年の臨床経験、臨床
研究に裏打ちされた講演内
容はとても説得力があり、ま
た、「専門家主体の指導では
なく、家族の育児支援につな
がる広汎性発達障害の早期
発見、子ども主体の支援活動
こそが重要である」という臨
床感に深い感銘を与えられま
した。

特別支援教育の実際と当
面の課題についても触れてく
ださり、実践現場で取り組む
ための目標を示された気がし
ました。

次回のセミナーもぜひ高橋
先生の講演を！という声も上
がるほどの充実した内容に、
この講演会を企画された故
西村先生の発達障害療育への
思いが偲ばれるひと時でもあ
りました。